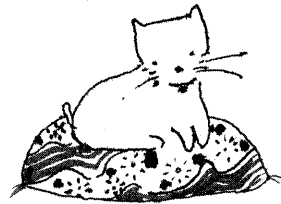


子どもの会話

(その五)

無藤 隆



会話は、会話者が協同して、共通の何らかの「世界」を作り出すことだと見なすことが出来る。幼児において、それがどこまで可能かを、このシリーズでは眺めてきている。目の前の物そのものの実利的な意味から離れて、その物に支えられつつも、ある違った意味を作り出していく。と同時に、その意味を新たに作り出す過程は、子ども同士のやり取りの中で、交渉を通じて成り立つものである。

ここで、意味とは何か。交渉とはどんなことか。それは、現在の所、一般的、抽象的に述べるより、具体的な例に即して語った方が良いでしょう。

今回は、会話が協力であるということ、そして、幼児でも、5歳ぐらいになれば、かなりの会話が出来るのだということ、5歳の二人の女の子が積木で遊んでいるところの例で分析しよう。

例1

K 作ろう、あたし。(積木を出して、横に並べる。)

M 公園作る。

K あたし、公園のさく作る。

M じゃ、わたし公園の中作るよ。

K これが入口だから、これちょっと開けるよ。

遊びを開始してすぐに、二人は何を作るか、テーマを設定する。そして、さらに、分担も決められる。この二人は普段から仲良く遊んでいるので、すぐにテーマが何のいざこざもなく決められたのだろう。Kが初めに作り始めたとき、何を作るかのイメージを持っていたかどうか分からないが、Mが「公園」と言ったとき、即座に受け入れ、「公園のさく」を作ることにする。おそらく、現に積木を並べており、それが「さく」にふさわしく感じられたのだろう。続いて、Mは、「公園の中」を作ると言う。公園のさくを作ると認めれば、公園が成り立つためには、中を作る必要がある。そして、さくとなる

積木の面なりに囲まれ始めた空間が見えてもいる。

このやり取りでは、相手の提案の承認は、いちいち受け入れの返事をすることによってではなく、相手の発話内容を発展・展開させることによって行っている。それは、仲が良く、相手の話を受け入れようとしていることに加え、二人が対等の関係を作っていることにもよる。その上に、積木の構成が目の前において発言を支えていることも見逃せない。

協力関係がなぜ分担の形を取るのでしょうか。例えば、全く一緒に作っていても良さそうなものだ。このような分担はこの例に限らず幼児、特に年長ぐらいによく見られる。分担が出来ることは既にかなり高度な達成だ。しかし、同時に、全くの協力的体制ではないのかも知れない。むしろ、一人遊びによる没入を部分的に可能にし、まだ不完全な伝え合いの技能を補うために工夫された形なのかも知れない。

ともあれ、テーマが定められ、二人は各々組み立てを始める。そこで早速、Kは入口を作る。これは、公園の

入口に違いない。テーマに沿ったものである。その入口は、実は、積木の列が角を作っているところをずらして、開けたものなので、この列（ \parallel さく）が角を作っていることで一つには思い付いたのだろう。そしてまた、公園のさくなのだから当然入口が必要だということ、さらに相手が中を作っているのだから、そこに外から入れる必要があるとも感じたのかも知れない。

この入口を作るのは、実行すると同時に、その旨発言されている。相手に確認を明示的に求め、協力を緊密なものとすると共に、相手の存在を尊重している。と共に、相手が異議を唱えるかも知れないことは、殆ど考慮していないようだ。事実、滅多に異議を唱えない。少しして、二人は次のようなやり取りをする。

例2

M でも、何かちっちゃいんじゃない？

K あ、もうちょっと。(さくを広げる。)

M ちょうどこうすればさ、入口になるんじゃない？

(さくの端を動かす。)

K 動物園作れば？

M そうだね。

K 動物園の方がいいわよ。

M もうちょっと広く、動物園、動物園。(さくを広げる。)

M 動物園ね。

K 動物園はこういう風に広いでしょ？

M うん。(四角の薄い積木を2枚縦に積み重ねる。)

「公園の中」に物を作って置いてみると、意外に狭いことに気付いて、Mはそのことを指摘する。それはおそらく、さくを広げるといふKへの要求でもある。さくを作っているのがKであることは互いに了解済みのことであるから、Mはそれを尊重して自分では手を出さない。中を作るのに狭いと、自分の側からの意見を述べる。Mは、この発言の前に、「階段」を中に入れていた。そして、「でも」と言っ、物を置くことは出来なくはない

が、しかし狭いのだということを強調している。Kは、さくは自分の分担だから、Mの指摘を要求と受け取り、すぐに広げている。

続いて、Mは、入口を作る。以前にKが行ったことを取り入れている。相手の分担に手を出しているわけだが、「すれば」、「なるんじゃない？」という言い方で相手への示唆という形を取り、分担を尊重している。

Kは、唐突に、動物園を作ろうと言い出す。Mは、「そうだね」と賛成しているようだが、例1にあるような発展的な受け答えをしていない。Kはそれを感じ取ってか、発話を繰り返し、その上で、さくをさらに広げながら、広いことと動物園とを結び付けている。広くするのは動物園を作るからだし、せっかく広いのであれば、公園より動物園の方が良いと言いたいようである。

確かに、公園と動物園は、遊ぶ場所で、さくに囲まれ、中にいろいろなものがありという点で似ていながら、子ども達にとっては、公園は近所の公園を連想して狭く感じられ、動物園は広いのかも知れない。Mはその

理由を挙げられ、一応説得させられたようである。積木を組み立て始めている。

公園と動物園は、いま述べたように似ている。子ども達が作ったものもこの時点では、公園でなく、動物園でも当てはまる。そこで、見立てを変えても困らない。テーマの変更は、その点でも受け入れ可能であった。もしかしたら、Mはまだ公園のつもりなのかも知れないが、これまでの物やそれと関連した行動の上では、矛盾は起こらない。

このやり取りの後、Kは様々な動物をめぐっての発話を行う。

〔中を指して言う。〕この辺にも、動物の。今は、動物はおるすです。〕

動物に当たる物がいないことをうまくごっこの世界の中の話として位置づけている。また、

〔Mの作っている物―おりにも見える―を指して〕なにそれは。何がいるの？　ここはペンギンとかがいるところよ。〕

Mの作っている物を動物園のおりと見なし、何が住んでいるのかを決めている。

「中に三角の積木をすべり台のように置いて」ここはペンギンのとこ。ここはペンギンのとこ。滑られるようにした。あのね、みわちゃん聞いて。ここからピョンと乗るでしょ。そしたら、こう来て、スーって滑るの。」ペンギンが住むという案を發展させている。

「Mが入口を作っているのに対し、そばに三角を立てて」はい、ここは動物園ですっていうしるししてあんの。ね、みわちゃん。」これに、Mは、「うん、いいよ。」とうなづく。

Mは、はつきりとかつ積極的に動物園を作ることを認めているように思えない。最低限の返事はするものの、Mが作っている物は、以前の公園の一部としても通るものばかりだし、動物に関連した見立てに乗っていかない。それに対し、Kは、自分の案に活気づき、また、Mの消極ぶりを感じ取ってか、しきりに動物についての見立てを行い、Mの同意を求める。「動物園のしるし」と

いういかにも動物園であるということを強調する見立てにMもうなづく。

その後で、そばにいた先生に、Kは、「先生、動物園作ってる」と言ってから、Mに、「ね、動物園ね。」と同意を求めている。が、Mははつきりと同意を示さない。その後、Kは、再度、「動物園のしるし」を作ることを持ち出すが、Mに無視され、結局、動物園の見立てはそこで終わりになる。そして、公園ないし遊園地という感じの物が作られていく。

Mは、動物園の案に最低限の同意は示し、また反対はしていないもの、おそらく、公園を作りたかったようだ。Kが動物園にこだわっている間、Mは、さく、入口、池、トンネルなどを作っている。

しばらく、二人は、いろいろなものを作って、工夫している。面白い形の積木に触発されながら、公園のテーマにふさわしいものをこしらえる。例えば、虹型の積木を出してきて、Mが、「虹、虹。ここ何にしようか。ここトンネルにしようか。」K、「違う、ここくぐって行く

の。「M、「いいよ。もう一つあるのね。」という具合に、虹型の積木を虹に見立てることから、公園にあり得るトンネルとし、さらに、すでに作ってある入口と関連づけている。

この後、狭くなったので、壊して、作り直すことになる。その際、Mは、「もっと広い、えーと、動物園にしようよ。」と、初めて、進んでKの動物園のテーマを認める。Mにとってやはり以前のは公園であって、それを壊して初めて、動物園に出来たのである。と同時に、Kがこだわったテーマをここで尊重したのである。が、しばらくして、結局、二人は、「遊園地」で合意する。K「遊園地でもいいじゃない」、M「うん、遊園地にしようか。」

この二人の協力の様子を眺めてきた。何を作るかの合意の元で、作るものを分担して、各々の工夫を尊重しつつ、所々で、相手の確認を求めていく。何を作るかのテーマは重要なもので、双方の積極的な合意がある。その

合意はうなずくだけでなく、そのテーマにふさわしい貢献を見立ての発言や物の作成で示す必要がある。何が作られていくかは、物自体の特性と、それまでの展開によって作られた物の集まりの形とその見立てによる「世界」のあり方を受けて、決っていく。その際、互いによく考えているかを伝えあい、発展させることがしばしばだが、同時に、全くの合意が成り立っていない場合もあり、それも行動やごっこの世界にひどく矛盾を起さなければ、ある程度容認される。ここでも、また、協同遊びまた会話は、参加者の交渉により成立し、維持されるのだが、その交渉は、参加者各々独自の志向を保持しつつ、共有された世界を構築しようとするものなのである。

(お茶の水女子大学)